

看護実践研究センター
令和4年度 活動報告書

公立大学法人山形県立保健医療大学

目 次

学長挨拶	1
看護実践研究センター長挨拶	2
1. 事業概要	3
2. 地元ナース事業推進部会	4
令和4年度小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム	5-15
令和4年度フォローアップ研修	16-18
令和4年度相互交流研修事業	19-22
令和4年度「地元ナース事業推進部会」事業評価表	23-29
令和4年度協力病院連携会議の概要	30-35
令和4年度協力病院連携会議参加者名簿	36
令和4年度地元ナース懇談会の概要	37-39
令和4年度地元ナース懇談会委員名簿	40
3. 教育力向上部会	41
4. 地域連携推進部会	42-43
5. 令和4年度看護実践研究センター運営委員名簿	44
資料	
・山形県立保健医療大学看護実践研究センター運営要綱	45-47
・山形県立保健医療大学看護実践研究センター運営規定	48-49
協力病院・施設、協力病院の位置づけ	50

令和 04 年度看護実践研究センター活動報告書の発行に際して

山形県立保健医療大学理事長・学長 上月 正博

公立大学法人山形県立保健医療大学看護実践研究センター（以下「本センター」）は、地域の医療福祉の充実に資する大学教育の内容・方法を本学看護学科とともに開発すること、山形県の看護実践水準の向上を図ること、その成果を全国・世界に発信し同様の地域性を有する看護系大学等の先遣としての役割を果たすことを目的としております。

本センターは、県内の看護職を対象に看護継続教育、研究指導、情報発信等をおこなうことにより、山形県の看護実践水準の向上を図るという目的で、文部科学省「課題解決型高度医療人材養成プログラム」の中の「地域での暮らしや看取りまで見据えた看護が提供できる看護師の養成」事業の一つとして「山形発・地元ナース養成プログラム」が採択されたことを契機として、平成 26（2014）年 12 月 1 日に開設されました。国からの補助が終了した令和元（2019）年度からは本学独自の事業として取組むこととなり、「地元ナース事業」に加えて、「教育力向上事業」「地域連携事業」なども本センターの活動範囲とし、対象も小規模病院等に限定せずに山形県内の看護職全体に拡大し、現在に至っております。

令和 04 年度は、令和 02 年度から続く新型コロナ・ウイルス感染症とそれに対する対応ということで、活動に制約を受けました。しかし、本報告書にありますように、637 ヶ所に募集をかけた例年通りの受講者数を達成するとともに、新規施設からの受講申し込みもあり、拡がりを見せております。昨年度の連携会議でいただいた要望を反映し、高齢者に対する根拠に基づく看護やフィジカルアセスメントを講義に組み込むなど工夫を凝らしました。結果的には、リカレント教育事業、相互交流、ICT 活用を中心に目的とする活動をほぼ達成し、外部評価でも概ね A 評価をいただいております。

本センターの活動は、本県のみならず、全国における諸々の保健・医療・福祉の問題に対する解決策の一助になると期待されます。今後、これまでの取り組みを継続していきながら、その成果をひろく発信し、さらに一層の充実をはかっていきたいと考えております。今後とも、皆様のご指導・ご鞭撻をいただければ幸甚に存じます。

（令和 05 年 2 月吉日 記）

ご挨拶

● 続いたコロナ禍とセンター事業

2020年1月30日にWHOがパンデミックを宣言し、同年3月末から山形県内でも蔓延が始まった新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）は、今年度も第7波・8波が到来しました。感染拡大のスピードが速いオミクロン株の流行により、センター事業の対象である医療機関等は大きな影響を受けました。事業担当者である看護学科教員も臨地実習の展開において様々な困難に直面しました。一方、困難な時代だからこそ、連携・協働しながらセンター事業を推進する重要性を深く認識したともいえます。

センター事業は、一昨年度、昨年度と同じく「できることをできるときに」を合言葉に、コロナの流行の波を踏まえた日程調整及びリモート活用を進めてきました。センターの主要事業である地元ナース事業、教育力向上事業、地域連携事業については、ほぼ計画通りの内容を行うことができましたが、事業の発展性について新たな目で検証する時期を迎えていると思われます。皆様もご存知の通り、来年度の2023年5月8日にコロナを感染症予防法上の5類とすることを国が公表しています。with コロナの時代のセンター事業は手探りともいえます。あらためて山形県や県医師会、看護協会と連携しながら事業に取り組んでいきたいと思っております。

● 新たな芽生え

今年度、教育力向上事業の一環として「非日常課題から抽象性を育てる-ブロックで考える私たちの2030年」のセミナーを開催しました。このようなタイトルのセミナーは看護界では異色なものといえます。教育力向上部会が作成したチラシには「他者の思考過程を『自分だったらどう考えるか』と考えがち」「この方法では予想外の背景をもつ患者や家族への理解ができず混乱をひきおこしやすくなる」「他者の存在を想像して推察する洞察力を育てたり、再確認することが重要」との説明がなされています。同セミナーには6名の看護師が参加しました。このようなセミナーは、大学が行うリカレント教育ならではのもの、といえます。

現在、国はリカレント教育（学び直し）を強かに推進しています。今後も看護実践力向上を目指した様々なタイプのリカレント教育を開発していきたいと思っております。

● センターの目標

本センターは、①地元ナースが地域包括ケア時代のフロントランナーとなる看護実践水準の向上を図る、②本学看護学科の教員全員を本センターの所属とする強みを生かし、地元医療福祉を強化した大学教育（授業や実習等）をセンター事業と連動させる、特色を有しています。成果を全国・世界に発信していくことや、大学教育の内容・方法を本学看護学科とともに開発し、同様の地域性を有する看護系大学への波及を目指しています。

皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

センター長 菅原 京子（看護学科教授）

令和4年度（2022年度）看護実践研究センターの概要

目的

県内の看護職を対象に看護継続教育、研究指導、情報発信等を行うことにより、本県における看護実践水準の向上を図る。

看護実践研究センター職員

センター長 菅原 京子

兼任職員 看護学科教員

看護実践研究センター運営委員会

実践センターの円滑な運営を図るため、実践センターに運営委員会を置く。

実践センターに部会を置くことができる。

令和4年度看護実践研究センター運営委員

委員長 看護学科教授 菅原 京子

副委員長 看護学科教授 沼澤 さとみ

委員 看護学科教授 遠藤 和子

委員 看護学科教授 安保 寛明

委員 看護学科教授 桂 晶子

委員 事務局次長 齋藤 正彦

部会名【地元ナース事業推進部会】
委員名 菅原京子 佐藤志保 鈴木育子 高橋直美 齋藤愛依 鈴木龍生
<p>○小規模病院等看護職リカレント教育</p> <p>コロナ禍の影響はあったが、地元ナース事業の全体像のリーフレットを早期に周知したり、ICT活用を推進したことにより、当初予定通りのリカレント教育の実施ができた。</p> <p>「小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム」は令和4年8月23日～11月22日の期間に開催し12施設18名が参加した。3名は新規施設3か所からの申込であった。履修証明書交付を受けた修了生は4名、ほかは単元履修者であった。今年度はオンデマンド（録画配信）も試行したが、機材や技術上の課題等が浮上し、演習は対面での受講が基本と考えられた。同プログラム修了生を対象とする「フォローアップ研修」は申込時期がコロナ第7波とぶつかり参加者はいなかったが、昨年度のフォローアップ研修参加者が研修内で計画した看護研究を今年度実施し、令和5年3月1日の山形県公衆衛生学会で発表した。また、診療所看護職を対象とした「看護up to date」をオンラインで2回開催した（テーマ：糖尿病、精神疾患）。昨年度から実施している最上保健所保健企画課とタイアップしシミュレーターを用いた高齢者等施設介護職対象の研修会を2月に開催した。WEBと対面のハイブリッドで開催し、19名が参加した。</p> <p>○相互交流</p> <p>病院→大学は令和4年10月～12月に2施設3名で実施した。新型コロナウイルス感染症の影響により、学外での臨地実習への参加はできなかった。大学→病院は行わなかった。また、数年に渡り相互交流に参加してきた病院が、来年度の総合看護学実習Ⅰの新たな実習フィールドに予定されているなど、小規模病院との協働が進展している。</p> <p>○Jナースカフェ支援</p> <p>令和5年3月8日に3病院5名と教員5名でオンライン開催し、コロナ禍の新人教育について情報交換を行った。来年度は、「小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム」参加者がJナースカフェ内で自病院の看護実践や研究活動を紹介できる企画を検討していきたい。</p> <p>○協力病院会議、地元ナース懇談会</p> <p>令和5年2月8日に「連携協力病院会議」を開催した。9病院14名がオンラインで、1高齢者施設1名が来学した。大学からは7名が参加した。2月9日には「地元ナース懇談会」を開催した。懇談会委員4名（山形県看護協会常任理事、保健所長、本学卒業生、GP経験のある市民）及びオブザーバー1名（山形県医療政策課担当者）がオンラインで参加した。大学からは7名が参加した。会議、懇談会ともに、コロナ禍の影響やICT活用推進についての意見があった。また、事業周知における県医師会や看護協会との連携の重要性についても話し合われた。→地元ナース懇談会の評価結果は別紙参照。</p>

令和4年度小規模病院等看護ブラッシュアッププログラムの実施結果

1. 開講科目等

科目名	単元数(ICT開講単元数)	時間数(時間)
看護の動向と課題	1 (1)	4.5
地域密着連携	6 (2)	13.5
根拠に基づく看護	5 (4)	22.5
看護研究の基礎	9 (6)	22.5
合計	21 (13)	63

2. 開講日等

開講期間：令和4年8月23日(火)～令和3年11月22日(火)

開講日数：14日

3. 履修者数

18名 (小規模病院17名、地域包括支援センター1名)

<内訳>

○申し込み時

全科目履修希望者数 5名

(小規模病院5名、地域包括支援センター0名)

単元履修者数 13名

(小規模病院12名、地域包括支援センター1名)

○終了時

全科目受講者数 (R4年度のみ履修)3名、(R3年度から履修)1名

(小規模病院4名)

単元履修者数 14名

(小規模病院13名、地域包括支援センター1名)

受講単元数の内訳

受講単元数	1	2	3	4~6	7~9	10~12	13以上
人数	0	2	4	4	3	0	5

4. ICTの利用状況

・履修者：14名中9名利用

・全科目履修者：4名中2名利用

5. 履修証明書の交付について

全科目履修者3名と令和3年度からの受講者1名を合わせた4名について看護学科教員会議に諮り、

修了についての審議を行った。4名全員修了と認定し、履修証明書*を交付した。

*本ブラッシュアッププログラムは、学校教育法第105条に基づく「履修証明プログラム」として実施しており、60時間以上の講習を受講し、修了要件を満たした者には、本学から同法に基づく「履修証明書」が交付される。

6. 満足度・理解度等について

各講義終了後に回収した Minute Paper から、講義への取り組み、講義内容の理解度、講義の満足度を分析した。

1) 講義への取り組みについて

【講義への参加度】

- ・大学での受講者において、「参加できた」「どちらかといえば出来た」は、99.4%だった。
- ・ICT利用の受講者において、「参加できた」「どちらかといえば出来た」は100%だった。

【内容の理解度】

- ・大学での受講者において、「理解できた」「どちらかといえば出来た」が100%であった。
- ・ICT利用の受講者において、「理解できた」「どちらかといえば出来た」が99.4%だった。

【講義の満足度】

- ・大学での受講者において、「満足できた」「どちらかといえば出来た」は100%だった。
- ・ICT利用の受講者において、「満足できた」「どちらかといえば出来た」が100%であった。

⇒ 講義内容や構成に関して、参加度や理解度から概ね良いと考えられる。ICTについて、受講者より、会場の講師と受講者の会話が聞き取りにくかった、との声があった。その他に問題はなかったようであった。

7. 感染対策

- ・本学の新型コロナウイルス感染症予防に係る学内外行動等ガイドラインに則って、感染対策をとった。講義室入口に消毒液を設置した。座席の間隔は1m以上あけて配置し、換気を適時行った。

8. 課題

- ・ICT利用の受講者から、会場の講師と受講者の会話が聞き取りにくかった、との声があった。これは、講師と受講者の会話がマイクで拾われなかったことが原因と考えられた。
- ・新型コロナ感染症の影響により、急遽履修出来ない単元が出た受講者が複数おり、受講意欲の低下が懸念された。

9. 今後の検討事項

- ・ICTでの音声の聞き取りが悪くならないよう、会場の講師と受講者の会話を明瞭に拾うことができるように、会場でのマイクの配置や付け方を工夫する。
- ・受講者が急遽受講できなくなった状況でも直ぐにICTに切り替えて対応できるよう、連絡をスムーズにすることができるような体制を整える。



令和 4 年度 履修証明プログラム・職業実践力育成プログラム

小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム

受講生募集要項



公立大学法人山形県立保健医療大学

看護実践研究センター 地元ナース事業推進部会

■ 小規模病院等看護ブラッシュアッププログラムとは

本学が独自に山形県内の小規模病院・診療所、高齢者施設等に勤務する看護職を対象に行うプログラムです。

小規模病院等の看護職の方々が地元の医療福祉の担い手としての役割を再認識し、発展的な看護を実践する能力の向上を図ることを目的としています。

なお、このプログラムは「履修証明プログラム」及び「職業実践力育成プログラム」となっています。

◆ 履修証明プログラムとは

履修証明プログラムとは、社会人等の者を対象に大学等が、一定のまとまりのある学習プログラムを提供するプログラムです。プログラムを受講し修了要件を満たした者には、大学から学校教育法に基づく履修証明書を交付することができることとなっています。

本学では、履修証明プログラムとして、「小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム」を実施しています。

◆ 職業実践力育成プログラムとは

文部科学大臣が認定した大学、大学院、短期大学及び高等専門学校（以下、「大学等」という。）における社会人や企業等のニーズに応じた、主に社会人を対象とした実践的・専門的なプログラムです。正規課程と60時間以上の体系的な教育で構成される履修証明プログラムが対象となっています。

1 出願要件

大学入学資格を有する者又はこれと同等以上の学力を有すると認められる者で、次の要件のいずれかに該当する者としてします。

- ① 病床数が原則として200床未満の病院に勤務する看護師、保健師、助産師
- ② 有床又は無床の診療所に勤務する看護師、保健師、助産師
- ③ 高齢者施設又は障がい者施設に勤務する看護師、保健師、助産師
- ④ 訪問看護ステーション又は在宅ケア関連機関に勤務する看護師、保健師、助産師

*上記の要件に該当しない場合でも、学長が認めた場合は受講が可能ですのでご相談ください。

2 募集定員

20名程度

*応募者が定員を上回った場合は、選抜を行う場合があります。

3 出願受付期間

令和4年7月11日(月)～令和4年8月5日(金)

4 受講料

無料

5 出願書類

- ①履修証明プログラム受講願書兼履修者登録票(写真貼付)
記入方法は別紙をご参照ください。(ご不明な点はお問い合わせください。)
- ②受講単元申込書

6 出願方法

願書を提出する場合は、簡易書留とし、封筒の表に「ブラッシュアッププログラム願書在中」と朱書きし郵送してください。令和4年8月5日(金)消印有効です。

7 履修許可証の送付について

出願書類受領後、随時送付します。

8 履修証明書の交付

連続する2年以内に、カリキュラムの中から合計60時間以上を履修し、修了と判定された者に履修証明書を交付します。

◆ プログラムの概要

1 名称

小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム

2 受講期間

令和4年8月23日(火)～令和4年11月22日(火)

*開講式及びオリエンテーションは、講習会初日(8月23日)10時から行います。

*閉講式は最終日(11月22日)の講習終了後に行います。

3 受講の方法

- ①履修証明書の取得を目的としない、いくつか単元を選択して受講することも可能です。
- ②裏面のカリキュラムのICT欄に「○」のついている科目は、対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド型授業です。講義(演習は除く)をライブもしくは開講翌日以降に視聴することが可能です。

* ICT (Information and Communication Technology) とは情報通信技術の総称です。

■ 願書の請求・提出先及び問い合わせ先

公立大学法人山形県立保健医療大学 看護実践研究センター

〒990-2212 山形県山形市上柳 260 番地

TEL / FAX: 023-686-6614

E-mail: ns-cent@yachts.ac.jp

5 カリキュラム

ブラッシュアッププログラムは、次の4つの科目で構成されています。

科目名	単元名	単位	授業時間・担当講師名	開講日	ICT
看護の動向と課題	・看護の動向と課題	3	菅原京子・佐藤志保	8月23日(火)	○
地域密着連携	・地域医療連携の概要と現状	2	菅原京子	8月30日(火)	○
	・リハビリ職からみる地域医療連携	1	みゆき会病院 黒田昌宏		○
	・連携のためのスキル	3	NPO 法人まちづくり学校 稲村理紗	9月6日(火)	/
	・地域包括ケアシステムの現状と課題 MSW が果たす役割	1	訪問診療クリニックやまがた 五十嵐絵美	9月13日(火)	○
	・地域包括ケアシステムの現状と課題 コミュニティが果たす役割	1	地域包括ケア総合推進センター 東海林かおり		○
	・事例を通して地域包括ケアシステムを 考える	1	五十嵐絵美・東海林かおり 高橋直美		/
根拠に基づく看護 *演習あり	・摂食・嚥下困難を抱える患者の看護	3	山形済生病院 梁瀬文子	9月20日(火)	○
	・皮膚ケアの看護	3	山形大学医学部看護学科 片岡ひとみ	9月27日(火)	○
	・生活習慣病を抱える高齢患者の看護	3	佐藤志保	10月4日(火)	○
	・フィジカルアセスメント 呼吸器	1	佐藤志保	10月11日(火)	/
	・フィジカルアセスメント 循環器	1	齋藤愛依		/
	・フィジカルアセスメント 腹部(消化器系)	1	高橋直美		/
	・急変時の看護	3	山形県立中央病院 峯田雅寛	10月18日(火)	○
看護研究の 基礎	・看護研究の進め方	3	佐藤志保	10月25日(火)	/
	・量的研究の基礎	1	齋藤愛依	11月1日(火)	○
	・質的研究の基礎	1	今野浩之		○
	・事例研究の基礎	1	佐藤志保		○
	・倫理的配慮	1	遠藤恵子	11月8日(火)	○
	・研究発表の意義と方法	1	高橋直美		○
	・研究計画書の作成方法	1	菊地圭子		○
	・研究計画書の作成	3	菅原京子・鈴木育子・佐藤志保	11月15日(火)	/
	・研究計画書の発表準備	2	菅原京子・鈴木育子・佐藤志保	11月22日(火)	/
・研究計画書の発表	1	/			

網掛け: 本学教員

* 1日3時限の開講になります。(Ⅰ:10:30-12:00 Ⅱ:13:00-14:30 Ⅲ:14:40-16:10)

* ICT欄に「○」のついている科目は、対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド型授業です。講義(演習は除く)をライブもしくは開講翌日以降に視聴することが可能です。

* プログラムの内容およびカリキュラムツリーは、山形県立保健医療大学 看護実践研究センターのホームページ(<http://www.yachts.ac.jp/>)にも掲載しています。

令和4年度 小規模病院等看護ブラッシュアッププログラムシラバス

<開講目的>

小規模病院等の看護職が、地元の医療福祉の担い手としてその役割を再認識し、発展的な看護を実践する能力の向上を図ることを目的とする。

科目	看護の動向と課題	科目担当者	菅原京子 佐藤志保	
授業形態	講義	時間数	4.5時間=90分×3回	
授業概要	1. わが国の看護や看護教育の変遷と現状、今後の展望と課題等について学ぶ 2. 自己の看護体験のリフレクションや講義を通して、看護について考える機会とする			
授 業 計 画				
回	単元	学 習 目 標	内 容	担当
1	看護の動向と課題	1. 看護の専門性について理解する 2. 今日の医療と看護の変化について理解する 3. 看護の社会的責務について考える	専門職とは、専門職としての看護 疾病中心からヘルスプロモーションへ 施設内看護～地域基盤看護へ チーム医療の推進と専門職等の役割分担 特定行為	○ 菅原京子 佐藤志保
2		1. 日本の看護教育の現状と特徴を理解する 2. 看護教育課程の特徴を理解する 3. 最近の教育方法について理解する	看護基礎教育・継続教育の全体像、欧米との比較 による日本の看護の資格/教育制度の特徴 保助看法と指定規則の関係、大学教育と専門学校教育 能力(コンピテンシー)の重視、時代による変化と「変わらない」こと	
3		1. 看護を構成する概念、看護理論家が考える看護について理解する 2. 自分自身の看護に対する考えについて他者と討議できる 3. 変化している医療・看護において自らが果たすべき役割を討議する	看護を構成する概念 看護理論家が考える看護 ・ナイチンゲール、ヘンダーソン、ベナー 経験のリフレクション	
評価方法	レポートまたは授業への参加度、ミニッツペーパーに基づき総合的に評価			

* ○印 ICT 該当

科目	地域密着連携	科目担当者	高橋直美 佐藤志保	
授業形態	講義・演習	時間数	13.5時間=90分×9回	
授業概要	1. 地域医療連携の必要性やあり方を検討する 2. 地域包括ケアの現状と課題を抽出し、改善策を検討する機会とする 3. 連携をすすめるうえで必要な基本的スキルを習得する 4. 保健・医療等専門職および住民と協働して包括ケアを実践する方法を身につける			
授 業 計 画				
回	単元	学 習 目 標	内 容	担 当
1	地域医療連携の概要と現状	1. 地域医療連携、地域包括ケアに関する基礎知識について確認する	<ul style="list-style-type: none"> ・地域医療連携とは ・地域包括ケアとは ・多様なサービス提供機関と専門職 ・健康格差の縮小を目指した活動 ・地域の強みと住民力の活かし方 	菅原京子 ○ 佐藤志保
2		2. 地域の強みと住民力を活用した地域医療連携のあり方を考える		
3		1. リハビリ職の保健医療福祉における連携の現状と課題を理解する		
4	連携のための基本的なスキル	1. 「対話を通じた多職種連携」の実践に向け、ファシリテーションのスキルを身につける	<ul style="list-style-type: none"> ・「対話を通じた多職種連携」を実践できるようにするためのファシリテーションのスキルを講義とグループ演習を通して体験的に学ぶ 	稲村理紗
5				
6				
7	地域包括ケアシステム現状と課題	1. 地域包括ケアシステムにおける取り組みの現状と課題を理解する	<ul style="list-style-type: none"> ・連携の現状と課題 ・MSWが果たす役割 	五十嵐絵美 ○
8		2. 地域に暮らす人々への自己の関りを考える	<ul style="list-style-type: none"> ・連携の現状と課題 ・コミュニティが果たす役割 	東海林かおり ○
9		1. 事例を通して地域包括ケアシステムを考える	<ul style="list-style-type: none"> ・グループワーク 	五十嵐絵美 東海林かおり 高橋直美
評価方法	レポートまたは授業への参加度、ミニツツペーパーに基づき総合的に評価			

* ○印 ICT 該当

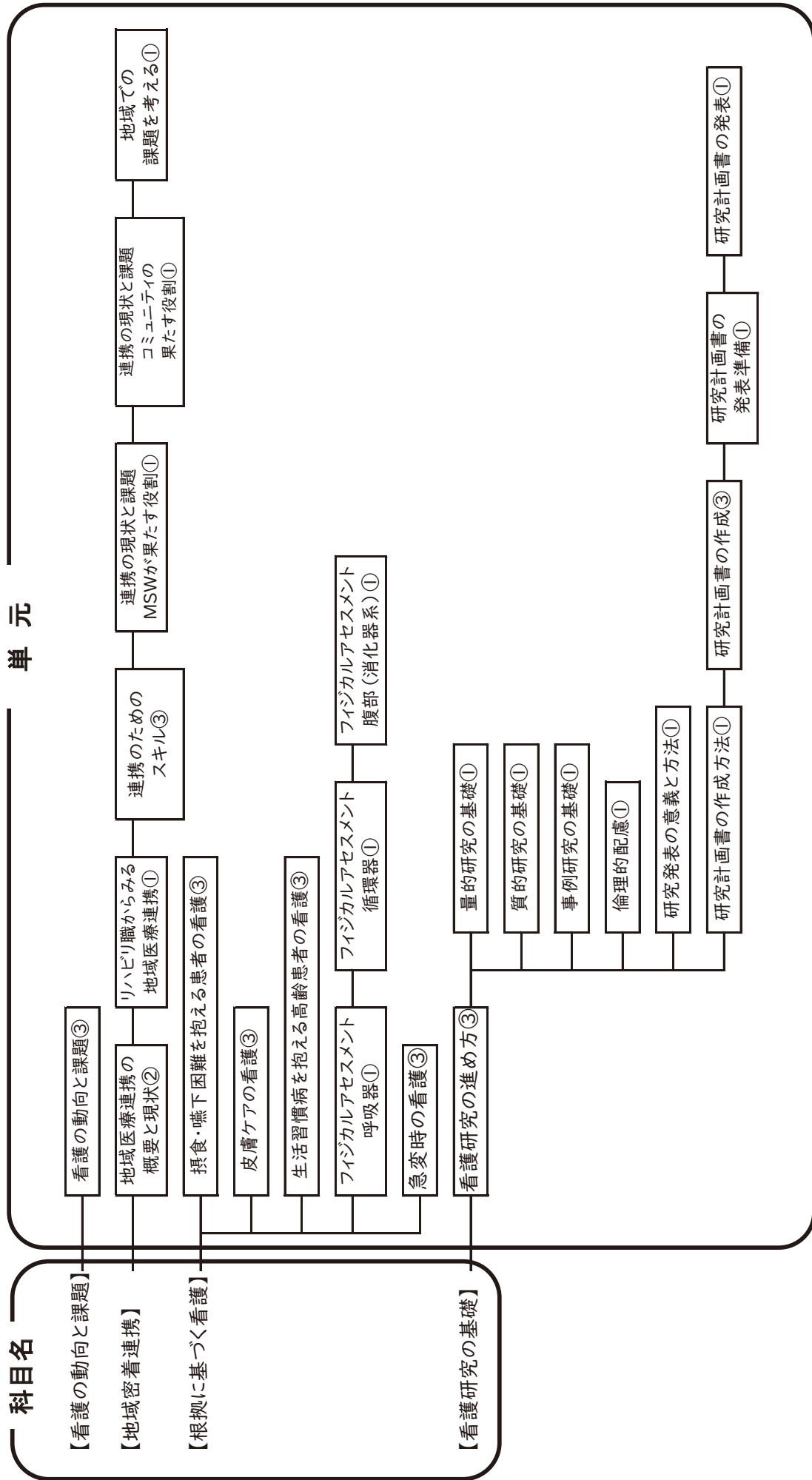
科目	根拠に基づく看護	科目担当者	高橋直美 佐藤志保	
授業形態	講義・演習	時間数	22.5 時間=90 分×15 回	
授業概要	1. 講義や演習を通して看護実践の根拠を明確にし、既存の知識との統合を図る 2. 根拠に基づく知識と技術を確認する機会とする			
授 業 計 画				
回	単元	学 習 目 標	内 容	担当
1	摂食・嚥下困難を抱える患者の看護	1. 摂食嚥下障がいメカニズムを理解する	<ul style="list-style-type: none"> ・栄養状態、摂食のアセスメント ・患者の状態別援助の実際 ・演習 	梁瀬文子 ○
2		2. 誤嚥予防目的の嚥下機能の評価と嚥下と栄養の関係について理解する		
3				
4	皮膚ケアの看護	1. 皮膚の構造と役割から高齢者の皮膚の特徴を理解する	<ul style="list-style-type: none"> ・皮膚の構造 ・スキンケアのケア・予防 ・褥瘡ケアと発生後のアセスメント ・演習 	片岡ひとみ ○
5		2. スキンケアのケア・予防の基礎知識を身につける		
6		3. ポジショニングの方法、考え方を習得する 4. 褥瘡のアセスメント方法を理解する		
7	生活習慣病を抱える高齢患者の看護	1. 生活習慣病を抱える高齢患者の特徴について理解する	<ul style="list-style-type: none"> ・生活習慣病を抱える高齢患者の特徴 ・生活習慣病を抱える高齢患者のケア 	佐藤志保 ○
8		2. 高齢者の生活習慣病の病態生理や治療、療養支援について理解する		
9				
10	フィジカルアセスメント	1. 対象者の状態を把握するための身体的な情報収集（フィジカルエグザミネーション）の方法を理解し、フィジカルアセスメントができる	<ul style="list-style-type: none"> ・アセスメントとは ・呼吸器のフィジカルエグザミネーション ・事例を用いたフィジカルアセスメント 	佐藤志保
11			<ul style="list-style-type: none"> ・循環器のフィジカルエグザミネーション ・事例を用いたアセスメント 	齋藤愛依
12			<ul style="list-style-type: none"> ・腹部（消化器系）のフィジカルエグザミネーション ・事例を用いたフィジカルアセスメント 	高橋直美
13	急変時の看護	1. 急変に遭遇した際、看護師として患者を評価し、適切な救急処置が実施できる	<ul style="list-style-type: none"> ・急変時の看護とは ・急変時のアセスメントと看護の実際 ・事例から対応策を考える 	峯田雅寛 ○
14				
15				
評価方法	レポートまたは授業への参加度、ミニツッパーパーに基づき総合的に評価			

* ○印 ICT 該当

科目	看護研究の基礎	科目担当者	高橋直美 佐藤志保		
授業形態	講義・演習	時間数	19.5 時間=90 分×13 回		
授業概要	1. 看護研究の意義を理解し、実践と研究を関連づけて捉える機会とする 2. 看護研究のプロセスを学び、研究計画書を作成する 3. 看護研究の講義や演習をとおして、論理的な考え方を身につける				
授 業 計 画					
回	単元	学 習 目 標	内 容	担当	
1	看護研究の進め方	1.看護研究の意義を理解する	・研究とは何か	佐藤志保	
2		2.研究の過程を理解する	・研究をする意義		
3		3.研究の様々なデザインを理解する 4.実践の中で感じる疑問や改善点を考えることができる	・実践における看護研究の位置づけ・研究デザイン ・実践の中で感じる疑問や改善点を考える		
		5.研究に関心を持つことができる	・文献検索一気になる事柄について文献を調べる		
		6.研究テーマを見つけることができる	・文献検索の目的や意義・医中誌他文献検索の実際 ・各個人で関心のある文献を 2~3 編程度選定する		
4	量的研究の基礎	1.量的研究を概観できる 2.論文(量的研究)を読み、記述されている内容を理解する 3.アンケート作成の留意点を理解する 4.自分の研究課題と量的研究の関連を考える	・量的研究の基礎を学ぶ ・調査用紙の作成について学ぶ	○ 齋藤愛依	
5	質的研究の基礎	質的記述的研究の特性を理解し、自己の研究課題との関連を考えることができる	・質的記述的研究の特徴 ・研究計画の進め方	○ 今野浩之	
6	事例研究の基礎	1.事例研究の意義と方法について理解する 2.自分の研究課題と事例研究の関連を考えることができる	・事例研究の基礎を学ぶ ・事例研究の進め方について	○ 佐藤志保	
7	研究計画書の作成と発表	倫理的配慮の基本について理解する	・看護研究における倫理的配慮の必要性和原則	遠藤恵子○	
8		研究成果を発表する意義と方法について理解する	・看護とプレゼンテーション ・研究成果を発表する意義 ・学会発表と論文投稿	○ 高橋直美	
9		研究計画書の作成について理解する	・研究計画書に問われるもの、書き方等	○ 菊地圭子	
10				・研究計画書の作成	菅原京子 鈴木育子
~ 15				・研究計画書の完成に向けて個々に作業 ・研究計画書を発表し、意見交換を行う	
評価方法	レポートまたは授業への参加度、ミニツツペーパーに基づき総合的に評価				

* ○印 ICT 該当

令和4年度小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム カリキュラムツリー



* ○内の数字は、講習回数。
 1回の講習は90分
 合計 24回(63時間)

「地元ナース事業推進部会」令和4年度フォローアップ研修実施要項

小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム履修証明プログラム修了者を対象に、ブラッシュアッププログラムの学びをさらに深め、現場で活用することが出来るようにフォローする研修である。

I 目的

- ・小規模病院等で展開するスタッフ教育を実施できる企画力と調整力を養う。
- ・小規模病院等における新人看護師・スタッフへの指導力を培う。
- ・発展的な看護を実践する能力の向上を図る。

II 対象者

小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム履修証明プログラム修了者

III 研修開催期間・開講時間

- ・開講期間：令和4年8月～令和5年1月（11日間）
- ・開講時間：〈1時限〉10:30～12:00 〈2時限〉13:00～14:30
〈3時限〉14:40～16:10 〈4時限〉16:20～17:50

IV 研修内容・学習方法について

1.指導カススキルアップ研修（全5回） *印の日はZoomでの参加可

学習内容：根拠に基づく看護をテーマとし、シミュレータを用いた研修会の企画・実施・評価。

学習方法：演習を通して研修会の企画のプロセスを展開、実践する。

回	日程	時限	具体的な内容
1	8月24日(水)	2	シミュレータの活用について
		3	・フィジカルアセスメントモデル「フィジコ」 ・中機能シミュレータ「ナーシングアン」 ・リトルアン(CPR訓練用モデル)など
2	* 9月7日(水)	2	研修会の企画
		3	・自施設のスタッフを対象とした研修会を想定し企画する
3	* 9月21日(水)	2	研修会企画
		3	・企画書作成、手続き、広報について
4	* 10月5日(水)	2	研修会企画
		3	・配布資料、研修会で使用する資料の準備
5	10月19日(水)	2	研修会実施
		3	・会場準備
		4	振り返りとまとめ

2.看護研究ステップアップ研修(全6回) *全日程 Zoom での参加可

学習内容:研究計画書の作成、研究方法の実践、研究のまとめと発表。

学習方法:演習を通して看護研究のプロセスを展開、実践する。

対面とICTの併用で行う。

回	日程	時限	具体的な内容
1	8月24日(水)	1	研究計画書を作成
2	9月7日(水)	1	研究計画書を完成
3	9月21日(水)	1	調査の準備・実施
4	10月5日(水)	1	研究の進捗状況報告・データ分析
5	11月9日(水)	1	まとめ
		2	
		3	
6	11月30日(水)	1	発表準備
		2	
		3	発表、意見交換

3.地元医療連携ステップアップ研修(全4回)

学習内容:連携をすすめる上で必要なスキル(ファシリテーション等)。

学習方法:学部学生の講義や演習(相互理解連携論)に参加し、ファシリテーションを体験する。

回	日程	時限	具体的な内容
1	令和4年 12月1日(木)	1	・授業のガイダンス
		2	・「相互理解」とは何か、「相互理解」を深めるために必要なことについて学ぶ ・学部学生の授業(講義・演習)に参加する
2	令和5年 1月17日(火)	2	・保健医療福祉分野以外も含めた連携の基礎と実際について学ぶ ・学部学生の授業に参加
		3	
		4	
3	令和4年 12月21日(水)	2	・保健医療福祉分野以外も含めた連携の実際について、外部講師によるパネルディスカッションをとおして学ぶ ・学部学生の授業に参加
		3	
		4	
4	令和5年 1月26日(木)	2	・連携を進める上で必要なスキル(アサーティブ・コミュニケーション、コーチング、ファシリテーション等)と、情報の共有によるコラボレーションについて講義・演習をとおして学ぶ ・学部学生の授業に参加
		3	
		4	振り返りとまとめ

- 1) 1~3の研修を、選択して参加することが可能である。各研修は、それぞれ通して受講することが望ましい。
- 2) 指導カススキルアップ研修と看護研究ステップアップ研修は、Zoomと対面を併用して行う。
- 3) 地元医療連携ステップアップ研修は、大学での対面研修である。
- 4) 受講料は無料。

V その他

- ・新型コロナウイルス感染対策として、マスクの着用・手洗い・物品の消毒・社会的距離を保つ等留意してください。
- ・研修日の朝は検温を行い、熱がある場合は研修への参加はご遠慮ください。また、体調が悪い時も、研修への参加は控えて下さい。

VI 全日程表

回	日程	時限	研修	Zoom 参加
1	8月24日(水)	1	1.看護研究ステップアップ	可
		2	1.指導カスキルアップ	
		3		
2	9月7日(水)	1	2.看護研究ステップアップ	可
		2	2.指導カスキルアップ	可
		3		
3	9月21日(水)	1	3.看護研究ステップアップ	可
		2	3.指導カスキルアップ	可
		3		
4	10月5日(水)	1	4.看護研究ステップアップ	可
		2	4.指導カスキルアップ	可
		3		
5	10月19日(水)	2~4	5.指導カスキルアップ	
6	11月9日(水)	1~3	5.看護研究ステップアップ	可
7	11月30日(水)	1~3	6.看護研究ステップアップ	可
8	12月1日(木)	1~3	1.地元医療連携ステップアップ	
9	12月21日(水)	2~4	2.地元医療連携ステップアップ	
10	令和5年1月17日(火)	2~4	3.地元医療連携ステップアップ	
11	令和5年1月26日(木)	2~4	4.地元医療連携ステップアップ	

令和4年度相互交流研修事業の実施結果

1 相互交流研修事業

小規模病院等の看護師と本学看護学科教員が、お互いの業務を理解し教育力の向上を図る。

2 交流実施日程等

(1) 大学 ⇒ 病院

今年度なし。

(2) 病院 ⇒ 大学

令和4年10月12日(水)～12月21日(水) (5日間)

2病院から計3名:寒河江市立病院1名、みゆき会病院2名

<研修内容>

	日程	時 限	項目	内容・方法	担当
必須	10月12日 (水)	1	オリエン テーション	相互交流の目的・大学教育について	菅原京子
		2		附属図書館など学内施設の見学と活用について	佐藤志保
		3		教員、研修参加者同士の交流	佐藤志保
* 複数 選択可	10月26日 (水)	1	教材の作成	web会議サービスを利用した授業や、動画コンテ ツ・アンケート・テストの作成・活用	菅原京子 佐藤志保
		2		動画コンテンツの作成	
		3			
	11月2日 (水)	1	大学教育における 看護学実習に関する講義と演習	実習の位置付け、組み立て ・大学教育における実習の位置づけや組み立て等 について	菅原京子
		2		実習受け入れの経験 ・実際に実習を受け入れた経験のある小規模病院 等の実習担当看護師より受け入れの実際について の講義	小規模 病院等 看護師
		3		自施設での実習受け入れの検討	菅原京子 佐藤志保
	11月11日 (金)	1	教材の活用	シミュレーターに触れ、操作を体験し、自施設での 研修への活用等の検討。	佐藤志保
		2	講義への参加	「在宅看護概論」学部学生の授業に参加	鈴木育子
		3	演習の体験	研修会活用スキル アイスブレイクの活用と体験	佐藤志保
	12月21日 (水)	1	講義・演習への 参加	「相互理解連携論」の概要について	佐藤志保
		2		「相互理解連携論」学部学生の授業に参加	外部講師
		3			
4		振り返り		佐藤志保	

3 参加者の主な感想・意見

<研修成果・所感>

- 教材の作成・活用：今までパワーポイントを作る機会が少なかったため、作成に抵抗を感じていたが、イラストの取り方、アニメーションの方法を学べたことで、パワーポイント作成に対する抵抗感が少なくなった。
パワーポイントに動画や音声を加えることで患者指導に活用することができることを学べたため、現場に持ち帰り活用していきたい
- 看護学実習：今まで自分が受けてきた実習スタイルと変わって、今は「自分たちが普段行っている看護やケアを言葉で伝える」、「具体的な患者との関わりを言葉にしていく」スタイルでないと学生には伝わらないという事も学ぶことができた。言葉にして伝えるという事は難しいが、看護を可視化し伝える事が必要だと感じた。
- 相互理解連携論：講義に参加し、今までの病院の役割、看護師の在り方に変化が現れてきていることがわかった。つるかめグループが、いろいろな企業とコラボして連携し、新たな事業を開発している内容を聞いて、今の病院ではなかなか実現は難しいが、いろいろな角度からいろいろなアプローチを試みることも大切だと思った。
- 在宅看護概論：講義を聞き、医療者側の理想を押し付けないよう、療養者やその家族の言葉に耳を傾けて支援していかなければならないと思った。
- アイスブレイク：その日の学習・研修内容に関連したアイスブレイクの内容を選択する必要がある、事前に試したり、時間管理やファシリテーターの役目も重要だと学んだ。実際にいろいろなアイスブレイクの方法を体験できたため、今後は研修内容に関連したアイスブレイクを選び実践したい。
- シミュレーターの利用：実際にシミュレーターを利用したり、教材に触れることができて良かった。講義を受け学習するのもよいが、研修を開催する側の勉強ができ良かった。

<研修に対する意見・要望等>

- ・交流の場では、現在の学生の様子を聞くことができたり、実習生の受け入れ方、学生の実習の様子の話がとても印象的で、今後は是非参考にしたいと思った。また、研究のまとめなど、図書館も是非利用したい。
- ・全過程出席したかった。また機会があれば動画コンテンツの作成や、パソコン関係について学びたい。

4 総括及び今後の課題

- 今年度も【大学 ⇒ 病院】については、新型コロナウイルス感染症の影響により教員の派遣を取りやめた。次年度は新型コロナウイルス感染症の状況を見ながら、可能であれば派遣する。
- 今年度の【病院 ⇒ 大学】については、10月～12月に5日間の日程で実施した。初日は参加を必須とし、4日間は選択しての参加を可能とした。参加施設は2病院で、計3名が参加した。
- 今年度も新型コロナウイルス感染症を考慮し、病院実習への参加は計画に入れなかった。研修内容に、実習や講義の組み立てについての講義・演習を入れた。実際に大学の看護学実習（総合Ⅰ）を受け入れた経験について小規模病院の看護師より聞き、自施設で実習を受け入れるとしたらどのようなことができるか、プログラムを作成する演習を行った。自施設で実習を受け入れる際のイメージ作りに繋がったと考える。
- 今年度も複数の病院から研修への参加があったことで、同じような規模の病院ならではの課題や実習の受け入れ等について情報交換ができた。
学部（2年次）授業の「相互理解連携論」では、「連携の基礎と実際」の講義および演習に参加した。相互理解連携論は、8コマ4日間の授業構成で行っている。授業の組み立てについて説明はしたが、学生の学びの様子を理解するために、8コマ4日間の授業にすべて参加できるように計画したかった。しかし、授業の日程調整がうまくいかず、1月まで延びてしまったため、1日間のみの参加になった。

「地元ナース事業推進部会」令和4年度相互交流研修実施要項

(小規模病院等看護師用)

I 相互交流の目的

小規模病院等の看護師と本学看護学科教員が、お互いの業務を理解し教育力の向上を図る。

II 到達目標

1. 大学教育に関するオリエンテーションを通して、本大学における教育理念、教育課程の編成や実施の方針、人材育成の取り組みについて理解することができる。
2. 講義や演習を通して、教材の作成と活用方法を学ぶとともに、看護学実習の構造や教員と臨床指導者との連携を理解することができる。
3. 教員との意見交換を通して、自施設の特徴をふまえ、実習の受け入れに関する課題や新たな実習の展望、自施設における人材育成の課題や展望を検討することができる。
4. 大学の講義や演習を通して、学生の様子を知る。また、学生がどのような内容の授業を受けているのか理解できる。

III 対象施設

協力施設 II 施設

公立高島病院、最上町立最上病院、川西湖山病院、小国町立病院、順仁堂遊佐病院
町立真室川病院、尾花沢病院、県立こころの医療センター、みゆき会病院、
寒河江市立病院、矢吹病院

IV 対象者

対象施設に勤務しており、所属長から推薦を受けた看護職者

V 相互交流に係る主な要件

- ・研修場所までの交通費や宿泊費については病院側で対応する。

***実習への参加は、諸般の事情により今年度は中止します。**

VI 日程と具体的な内容

	日程	時 限	項目	内容・方法	担当
必須	10月12日 (水)	1	オリエン テーション	相互交流の目的・大学教育について	菅原京子
		2		附属図書館など学内施設の見学と活用について	佐藤志保
		3		教員、研修参加者同士の交流	佐藤志保
＊複 数 選 択 可	10月26日 (水)	1	教材の作成	web会議サービスを利用した授業や、動画コンテ ンツ・アンケート・テストの作成・活用	菅原京子 佐藤志保
		2			
		3		動画コンテンツの作成	
	11月2日 (水)	1	大学教育における 看護学実習に関す る講義と演習	実習の位置付け、組み立て ・大学教育における実習の位置づけや組み立て等 について	菅原京子
		2		実習受け入れの経験 ・実際に実習を受け入れた経験のある小規模病院 等の実習担当看護師より受け入れの実際について の講義	小規模 病院等 看護師
		3		自施設での実習受け入れの検討	菅原京子 佐藤志保
	11月11日 (金)	1	教材の活用	シミュレータに触れ、操作を体験し、自施設での研 修への活用等の検討。	佐藤志保
		2	講義への参加	「在宅看護概論」学部学生の授業に参加	鈴木育子
		3	演習の体験	研修会活用スキル アイスブレイクの活用と体験	佐藤志保
	12月21日 (水)	1	講義・演習への 参加	「相互理解連携論」の概要について	佐藤志保
		2		「相互理解連携論」学部学生の授業に参加	外部講師
		3			
4		振り返り		佐藤志保	

◆研修の時間帯は下記のようになっています。

- ・1 時限：10:30～12:00
- ・2 時限：13:00～14:30
- ・3 時限：14:40～16:10
- ・4 時限：16:20～17:50

VII その他

- ・オリエンテーションを10月12日(水)10時30分より、3階多目的教育室にて行います。
- ・研修終了後、報告書を指定の様式に記入して提出してください。
- ・新型コロナウイルス感染対策として、マスクの着用・手洗い・物品の消毒・社会的距離を保つ等、留意してください。
- ・研修日の朝は検温を行い、熱がある場合は研修への参加はご遠慮ください。
- ・体調が悪い時も、研修への参加は控えて下さい。

令和4年度「地元ナース事業推進部会」事業評価表

(S: 計画を上回って実施している

A: 計画を十分に実施している

B: 計画を十分に実施していない

C: 計画を実施していない)

【リカレント教育】小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム

計 画	実 施 状 況	成果と今後の課題	自己 評価	外部 評価
<p>①1-3月 令和4年度の開講時期・内容・方法の検討・決定</p> <p>②5月 募集要項送付</p> <p>③8月-11月 プログラム開講</p>	<p>①令和3年度連携協力病院会議で得た要望や小規模病院の看護部長および全科目履修生を対象に実施したニーズ調査を参考に令和4年度のプログラム内容の検討を行った。変更した内容は以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・週1回(3コマ/日)開講 ・開講期間: 8月下旬~11月下旬 ・単元内容の一部変更 ・ICTでの受講可能な単元の増加 ・オンデマンド対応 <p>②募集要項を対象施設637ヶ所に送付した。</p> <p>③12施設から18名の受講申し込みがあり、その内3名は、新規施設3ヶ所からの申し込みであった。</p> <p>※新規施設: 天童温泉矢吹クリニック 医療法人健友会本間病院 地域包括支援センターあさひ</p> <p>昨年度から受講している人も含め、履修証明プログラム(60時間)で履修証明書交付を受けた修了生は4名であった。</p> <p>新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、対面での参加ができなかった単元の講義急遽ICT対応をしていなかったことから、演習をハイブリッド(対面・双方向オンライン)およびオンデマンド(録画配信)で開催し、受講の機会を提供した。</p> <p>※開催方法の詳細は、【ICT活用】で報告</p>	<p>【成果】</p> <p>出願受付期間およびプログラム開始時期が新型コロナウイルス感染症の感染拡大(7月-9月・第7波)と重なり、受講申し込みへの影響や受講辞退が懸念されていた。しかし、昨年度までの週2回の開講を週1回とすることで開講期間は長くなったが、所属施設や受講生の負担が減ったこと、対面とオンラインを組み合わせたハイブリッドおよびオンデマンド開催としたことなどが、受講のしやすさを得られ、例年通りの受講生数の確保や新規施設からの申し込み、受講生の満足度にもつながったのではないかと評価できる。</p> <p>受講生の学びの記録から、本プログラムが再学習や新たな知識の習得の機会になったと共に、小規模病院という同じ規模の病院に所属している看護師同士であることが活発なグループワークにつながり、同じような悩みを抱えている共通性を実感する機会にもなっていた。また、ハイブリット開催により、対面とオンライン参加者間での意見や情報交換ができていたことも受講生の満足度を高めることにつながっていたと捉えられる。</p> <p>【課題】</p> <p>講義と異なり、看護実践力の習得を図るための演習をオンデマンドで配信するためには、資機材の準備の他、講義の撮影とは異なるカメラアングルの音声入力、配信のための編集など、多様な配慮と工程が必要であったことから、担当者のみで</p>	A	A

<p>④8月・12月 プログラム前後調査 対象：全科目履修生 プログラム前調査項目： ・期待していること ・身につけたい力 ・学びの活用 ・興味関心の高い単元 プログラム後調査項目： ・期待に添える内容か ・興味関心が高かった単元 ・新たに学びたいこと ・改善点・要望</p> <p>⑤2-3月 次年度プログラムの検討</p>	<p>④受講前調査では、学び直しの機会とするだけでなく、新たな知識や技術を習得し、自己のスキルアップを図り、現場に還元できるようにしたいといった期待が捉えられていた。受講後調査では、看護を取り巻く現状がわかり、所属施設が地域においてどのような立ち位置にいるのか、看護師としての働きかけがいくかといったことを他施設の受講者とディスカッションし、情報交換の機会になったことが高く評価されていた。新たな学びとして、緩和ケアや終末期看護の他、学生と共に学ぶ機会への要望があった。</p>	<p>の継続は困難である。 【課題への取組方針】 ICTおよびオンデマンド対応は講義に限定し、演習は対面での受講を改めて基本とする（従来通り）。 受講後の要望を基に次年度のプログラム内容を再検討していく。</p>	
---	---	--	--

【リカレント教育】フォローアッププログラム研修

計 画	実 施 状 況	成果と今後の課題	自己評価	外部評価
<p>①6月 令和1～3年度にブラッシュアッププログラム修了生にフォローアップ研修案内送付</p> <p>②8-1月「フォローアップ研修」を実施する</p>	<p>①令和1～3年度のブラッシュアッププログラムの履修修了生でフォローアップ研修受講者15名に対し、フォローアップ研修案内を送付した。</p> <p>②参加の申し込みはなかった。 新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、参加できる状況ではなかったようである。</p>	<p>【成果】 今年度は参加申し込みがなく、研修を実施しなかった。 【課題】 感染症の影響があっても参加できるような環境（ICTの活用・研修内容等）を整える。 受講対象者のニーズと現行のフォローアッププログラム内容が合っているのか不明である。 【課題への取組方針】 参加が可能な環境を整えるために、連携協力病院会議で意見を聞く。 これまでのブラッシュアッププログラム修了生に対し、フォローアップ研修に関する調査を行い、現行のプログラム内容を検討する。</p>	B	B

【リカレント教育】Jナースカフェ

計 画	実 施 状 況	成果と今後の課題	自己 評価	外部 評価
<p>〇8月・3月 リカレント教育受講者や相互交流研修参加者を中心に、小規模病院等の看護職の交流・情報交換の場として「Jナースカフェ」を開催。</p>	<p>令和5年3月に、Zoomを利用したオンライン配信で開催する予定である。「コロナ禍での新採者教育」をテーマにプチ研修会、小グループでの交流会・情報交換会を行う予定。</p>	<p>【成果】 実施予定である。 【課題】 新型コロナウイルスの影響で、今年度の開催が1回になってしまった。 【課題への取組方針】 開催時期、内容等について、対象となる方へのアンケートや連携協力病院会議での意見を踏まえて企画時期を調整していく。</p>	B	B

【リカレント教育】看護 up to date

計 画	実 施 状 況	成果と今後の課題	自己 評価	外部 評価
<p>〇12月・3月「看護 up to date 研修」を実施する。</p>	<p>1 回目は、令和5年1月29日（日）13:30～15:00に、「アプリを活用した糖尿病学習支援について」のテーマで実施した。参加者は18名であった。研修後の参加者アンケートから、内容、開催曜日・時間帯等について 2 回目は、3月に開催する予定である。 〈ICT活用状況〉 Zoomを使用し、オンラインのみで研修を行った。</p>	<p>【成果】 過去の開催に比較して、参加者数は多い方であった。看護師を宛先にしたことで、看護師に案内が届くようになったようであった。 日曜午後の開催について、参加者の希望に合っていた。 【課題】 県内の診療所数が多く（約850件）、周知に費用がかかる。 【課題への取組方針】 周知方法はハガキだけでなく、既参加者にはメールで周知する。 年度初めに年間計画を送付し、HPで開催予定日を確認してもらう。メールでの案内通知を促進するため、メールマガジンを作成する。 研修会の実施後アンケートで、周知方法や内容についてアンケートを行い、診療所看護師のニーズを把握し、実施方法も含め内容を検討する。</p>	A	A

【相互交流】

計 画	実 施 状 況	成果と今後の課題	自己 評価	外部 評価
①10-12月 大学教員と小規模病院等の看護職との相互交流を行う。	①「病院から大学へ」の相互交流を、10～12月の期間で5日間行った。参加者は、2病院から3名であった。1名は全日程に参加し、2名は2日間を選択しての参加であった。今年度も、新型コロナウイルスの影響により、学外での臨地実習への参加はできなかった。「大学から病院へ」の相互交流は、新型コロナウイルス感染症の影響を考慮し、実施しなかった。	【成果】 新型コロナウイルス感染症のため活動の制限があったものの、内容はシミュレーターを使用したり、ポイントの作成や活用、看護学実習に関する講義・演習など、参加者のニーズに合ったものが組み入れられたと考える。 【課題】 参加者数が増えないため、施設と大学間の交流の範囲が広がらない。参加者数を増やす工夫が必要である。	A	A
②2月 相互交流を希望する小規模病院等の意向確認と調整を行う。	②連携協力病院会議で、相互交流への参加の意向や意見等を聞き取りする。	【課題への取組方針】 可能な範囲でICTを使用することで、参加しやすい環境を整える。希望する交流内容や方法を連携協力病院会議で聞き取りを行い、今後の相互交流のプログラムについて検討する。		

【ICT活用】

計 画	実 施 状 況	成果と今後の課題	自己 評価	外部 評価
オリカレント教育においてICTを活用する。	ICTはweb会議システムZoomを使用した。 ①令和4年度の小規模病院等看護ブランチアッププログラム全21単元の内、ICTでの受講可能な単元は13単元あった。今年度のICTを利用した受講者は、延べ56名であった。 当初は講義のみ、YouTubeを用いたオンデマンド配信する予定であったが、急遽ICT対応をしていなかった単元の講義や演習もオンデマンド配信の対応をした。 撮影方法は、講義はZoom配信の録画で、演習はビデオカメラやiPadを使用した。そ	【成果】 ①小規模病院等看護ブランチアッププログラムICTでの参加は昨年度より多く、受講者の満足度は高い評価であった。ICTを利用した受講者からは「大学までの移動や勤務で参加しにくいためオンライン形式は有益」、「講師と受講者の会話が聞き取れなかった」との感想があった。オンデマンド配信については「勤務の都合で当日休めないことがあり、利用でき良かった」との感想があった。ICT利用では、現地参加よりも移動距離や時間的制約が少ないため、受講の敷居を下げる効果があったと考えられた。 YouTubeを用いたオンデマンド配信は、再生数・	A	A

	<p>それぞれ録画したものを編集し、YouTubeで受講者に限定公開した。</p> <p>②看護 up to date は、オンライン形式でのみ行った。</p>	<p>再生時間から推測すると、あまり活用されていないかった。講義動画に比べ、演習動画の方が再生数は多かった。既に受講した人が、復習として活用していた可能性が考えられた。</p> <p>②看護 up to date 受講者からの Zoom 等の使用方法や配信トラブルについての問い合わせもなく、無事終了することができた。受講者のミニッツペーパーから、受講者側の端末トラブルがあった旨記載されていたが、問い合わせなく解決できていた。</p> <p>【課題】</p> <p>①小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム講師と受講者の会話がマイクを介さなかったことが原因と考えられた。 オンデマンド配信のための撮影や編集には、多くの技術と時間を要した。活用度も考慮し、今後の継続は検討が必要である。</p> <p>【課題への取組方針】</p> <p>①小規模病院等看護ブラッシュアッププログラムリモート配信時は、マイクの設置場所や取り付けの工夫をする。 リモート配信は、参加しやすさや学びの内容などの視点を踏まえ、より活用しやすいよう環境を整える。 リモート配信及びオンデマンド配信については、使用状況やニーズについて、連携協力病院会議での意見を踏まえ、実現可能かつ効果的な範囲で継続していく。</p>	
--	--	---	--

【事業普及・推進】

計 画	実 施 状 況	成果と今後の課題	自己 評価	外部 評価
<p>①ホームページ更新、ホームページメンテナンスの見直し、修正</p> <p>②本事業で実施した各事業の成果や課題をまとめ、関係学会への発表や論文投稿を行う。</p> <p>③2月 連携協力病院会議と地元ナース懇談会における事業評価をホームページで公表。</p> <p>④3月 令和4年度地元ナース推進事業部会事業報告書作成・ホームページ公表。</p>	<p>①令和4年度リカレント教育に関する実施要項など、ホームページに掲載した。大学のホームページは、リニューアル中である。リニューアル後、「看護実践研究センター」のページを更新し、カリキュラムや募集要項、事業報告等を掲載する予定である。</p> <p>②3月の山形県公衆衛生学会で、「診療所看護職を対象としたリカレント教育の現状と課題」の発表を予定している。</p> <p>③3月末に実施予定。</p> <p>④3月末に実施予定。</p>	<p>【成果】 大学のホームページのリニューアルに際し、看護実践研究センターのページについて、掲載様式について申し入れを行った。</p> <p>【課題】 リニューアル後、大学のホームページで本事業がわかりやすく掲載・更新されているか、確認していく必要がある。</p> <p>【課題への取組方針】 大学ホームページでのお知らせ欄での広報のほか、大学公式 Twitter 等を活用して地元ナース事業の広報を積極的に行う。 事業の案内のみならず、事業に参加した方々の声や感想等を発信することで、さらに地元ナース事業に対する興味や関心を持ってもらう。 年度中に、令和5年度の地元ナース事業の全体像（含む日程）がわかるパンフレット等を作成し、ホームページに掲載する。また、予算の範囲内で県内小規模病院等へ送付する。</p>	A	A

【事業評価】

計 画	実 施 状 況	成果と今後の課題	自己 評価	外部 評価
<p>①2月 本事業の協力施設の看護部長や各事業参加看護師を招き、連携協力病院会議を開催する。</p> <p>②2月 地元ナース懇談会開催。</p> <p>③その他</p>	<p>①2月8日（水）に「連携協力病院会議」を開催した。9病院14名がオンラインで、1高齢者施設1名が来学した。大学からは7名が参加した。</p> <p>②2月9日（木）に「地元ナース懇談会」を開催した。懇談会委員4名（山形県看護協会常任理事、保健所長、本学卒業生、GP経験のある市民）及びオプザーバー1名（山形県医療政策課担当者）がオンラインで参加した。大学からは7名が参加した。</p> <p>③当初計画にできなかったが、R5年度受審の大学の認証評価で、特色ある教育の一つとして地元ナースが取り上げられる予定となり、受審用ポートフォリオを作成中である。</p>	<p>【成果】 コロナ禍における地元ナース事業参加について具体的な意見交換がなされた。ICT活用の推進に関する意見が多かった。</p> <p>【課題】 オンライン開催により連携協力病院会議及び地元ナース懇談会の目的は達成された。一方、対面開催による波及効果（参加者交流による新しい発想の創造）は導けなかった。</p> <p>【課題への取組方針】 資料送付を早めてあらかじめ質問を集めるなどして、当日の運営に時間的余裕をもたせ、オンラインであっても参加者交流が図れるように工夫する。</p> <p>【成果】 地元ナースが本学の認証評価を通して成果として認められることとなった。</p> <p>【課題】 認証評価の準備が求められる。 【課題への取組方針】 認証評価の準備を行い、受審に対応していく。</p>	A	A

令和4年度 連携協力病院会議の概要

日時: 令和5年 2月8日(水)

13時30分~15時00分

オンライン会議(Zoom)

【出席者】

協力病院:

(小国町立病院) 佐藤三保、日下雅美 (公立高島病院) 高橋由美
(最上町立最上病院) 菅智美 (真室川町立病院) 井上典子
(町立金山診療所) 長岡由美 (寒河江市立病院) 渡邊ひろみ、青木明美
(みゆき会病院) 渡邊修、櫻井牧子 (順仁堂遊佐病院) 信夫松子
(川西湖山病院) 長谷部まゆみ、大淵愛、舟山美穂
(特別養護老人ホームはとみね荘) 島崎慎一

大学: 沼澤さとみ、菅原京子、鈴木育子、高橋直美、齋藤愛依、佐藤志保、鈴木龍生
齊藤正彦

【概要】

資料に基づき担当者より各項目について報告された。
その後、各項目について情報交換・意見交換を行った。

○小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム

(大学)

報告にも記載したが、昨年度の連携協力会議でいただいた要望をプログラムに反映させた。具体的には、根拠に基づく看護において高齢者に関する内容を扱った点、フィジカルアセスメントを講義に組み込んだ点などを組み込んだプログラム構成にした。看護研究についても、看護研究の基礎において、研究計画に取り組む時間を増やしじっくり取り組めるように変更した。今年度のプログラムをどのように評価しているかを伺いたい。

今年度新たな要望として、昨年度まで行っていた終末期看護に関する内容を扱ってほしいというものがあった。そのことについてもご意見をいただきたい。

(病院)

・コロナということもあり ICT で参加できるという基準で選んで参加した。
・受講してきてほしいと送り出しているが、送り出した職員が実際に学んできたことを自分の部署や病院に反映されにくい状況がある。病院の教育において何が課題になっているか、次につなげたい

ことは何か、それらについてどこまで考えて理解しているかについてが見えにくい。病院側も学んできた内容を反映させやすい教育体制にはなっていないことが問題ではないかと捉えている。病院の中での活かし方ということ、ブラッシュアップに参加した職員が学んできていることが必要である。加えて、教員からみでの受講生の評価できる点や課題などを共有することで病院に戻ってきてからも活かせる内容になるのではないかと考えている。

・終末期ケアについては当院でもお見送りする患者さんの数が増えているため欠かせない内容であると感じる。終末期をどういう風にご家族と一緒に支えていくかなどを学んでいただけると、研修に参加していないスタッフにも波及しやすい内容になるのではないと思う。

・研修に参加した後の、後追いでの内容の確認を行えていないことは当院での課題でもある。

・終末期看護についても興味がある分野であると思うが、今回の研修受講者に何を受けたいかまでは確認することができていない。

・参加者の感想としては新しい知識が得られたというものや看護実践に活かせる技術が身についたというものがあった。

・自分の病院がほかの病院から看護の面で遅れているのではないかと心配に思っていたが、自分の病院でもしっかり大丈夫なんだと客観的に見ることができよかったという感想もあった。

・受講者がフィジカルアセスメントについて伝達研修を行った。参加者は研修で学んできたことについてほかのスタッフの学びにもなっていると思う。フィジカルアセスメント以外のことについても伝達研修を行っていただけたらいいなと考えている。

・看護研究が課題となっていたため、基礎から学んで研究を継続していくことを当院では続けていきたいと思っている。

・当院は毎年 ICT での受講することが多かったが、今回は参加者から雰囲気や実際のやり取りがわかりやすいという理由で対面での受講を希望し、現地での参加が多かった。

・学んだことを次に生かすということが教育の面での課題ではある。伝達研修という形で企画したが、個人だけの学びでなく全体の学びとして伝えていくことが大切であると思う。

・個人的には受講の機会を提供するだけでも十分でないかと思っている部分もある。病院の中でいかに活かしていくかということや伝達講習ということまで言うと、受講者の中には負担になる人もいる。新たな知見が得られたとか、動機付けになったとか、そういった還元でも十分であると感じる。コロナのことで絶え間なく誰かが休んでいる現場にいる。そのリリーフ体制などでいっぱいになっている中でやっているため、詰め込みすぎると疲れてしまう。そういった理由もあり、学びたいという意欲がある職員には背中を押すが、学んだことをどう還元するかという点まで聞くことは控えた状況である。今後もしばらくはその方針で行きたいと考えている。

・受講者からは自身の看護を振り返りながら学びなおすことができたとの感想をもらっている。研修後の伝達講習は当院でも行っており、今回は嚥下の演習をみんなで行った。フィジカルアセスメントについても重要であるため今後も扱ってほしい。

・当院でも受講者に還元してもらいたいというところまでは考えておらず、行きたいという意欲を持った人を手上げ制で行ってもらっている。受講者は前向きな感想を持ってきてくれるので、よかったね

という形でとどめている。参加は極力対面で参加してもらっており、普段と違った環境で学ぶということが重要であると考えている。そのことが刺激になり次のステップにつながっていけばいいと感じる。来年は看護研究に力を入れていきたいため、前向きに参加を検討している。

・距離的に対面での参加が可能であるため、毎回対面で受講させてもらっている。毎年2名ぐらいずつ受講しており、はじめのころは行くことにあまり積極的ではなかったが、最近は職員から行きたいという希望が出てくるようになった。継続して受講することで、次は自分が行きたい、学びたいと思うことにつながり、小さな積み重ねが成果につながってきているのではないかと感じている。実践現場での課題として、当院は取り組みを可視化するという点が苦手であるため、ラダー教育に院内研究や学会発表を盛り込んでいる。そのこともあり、研究が課題であると感じている職員は受講したいと手を挙げてくれる。今年度参加した職員からは研究について詳しく学べたという感想が聞かれた。

・昨年度フォローアップ研修に参加した受講者が学会発表したが、今年度も発表したいとの声が聞かれるようになってきた。少しずつではあるが学んできたことが成果となり、ひとりがチャレンジすることで、ほかのスタッフがチャレンジすることに波及していると感じている。

・院外に出て学ぶということは重要であると感じている。院内で学んだことは意識として、知識として入っていくのではないかと感じている。

・今年度、看護学生のワーキンググループを立ち上げた。相互交流に参加した職員から、現在の学生を理解することができた、他の施設の実習受け入れの現状を確認でき参考になったという感想が聞かれた。対面でやり取りできてよかったという感想も聞かれた。

・2年跨いで昨年取得できなかった単元のみ受講した受講生の話では、きちんと全て成し遂げたというところが大きいようだった。昨年受講できず悔しい思いをしたこともあり、今年足りなかった単元の受講を成し遂げ、次にチャレンジしたいことに進んでいるようである。ブラッシュアッププログラムに参加することが院内教育に活かされている。具体的には受講生が主体となって院内の勉強会としてフィジカルアセスメントなどを学びなおす機会を設けたりと、院内教育に有効であると感じている。

・人数がギリギリの状態で開催していることもあり、現場を守るので精一杯であった。ICT を利用することで参加しやすくなると考えているため、来年度は改めて参加者を募ろうと考えている。

・地域のコロナのワクチン接種などもあり、研修にはあまり人員を出せていない状況ではあるが、単元での履修という形で来年度の受講を前向きに考えている。

・老健や特養などの施設では看護師の配置人数ギリギリで運営しているところが多く、人材確保が難しいところもある。入職してもらいにくい要因の一つに、施設看護職は勉強する時間を確保しにくいということがあのではないかと考えている。自分の事業所だけでなく、施設同士の連携の場で情報を共有していきたいと考えている。

・チラシでは読み流されてしまうこともあるが、ホームページが作成されることで自分から情報を取りに行くことができるため、より積極的に参加しやすくなると思う。定期的にチェックして声をかけていきたい。

(意見・感想を受けて大学から)

- ・病院でどのように活かしていくかという点までは情報共有したことがなかった。以前は新人教育につなげていきたいとの声をいただいていたため、新人教育を見越したプログラムにしていたが、すべての講義内容が新人教育に活かされるわけではないと思っている。個人の学びにはなっているが、他のスタッフや病院への還元というところではなかなか評価しにくい内容ではないかと感じる。今後、活かし方については病院・大学と連携して検討する時間を持っていきたいと感じる。
- ・受講生の中には伝達講習が負担になるという声を漏らしている人もいた。
- ・研究については年々取り組み方が熱心になっており、計画書の完成度も高くなっている。実践に即した問題意識から研究テーマを設定していた。今回の受講生の立案した研究計画についてぜひ確認し、何らかの形で実践してもらえると嬉しいと感じる。研究の実践については大学としても全面的にバックアップしていきたいと思う。

○フォローアッププログラム

(大学)

コロナの影響からかフォローアップ研修への参加者が昨年度は 0 人であった。内容的な部分もうまく伝わっていない可能性があるのではないかと考えている。現在の内容は看護研究、研修の企画、学生の授業への参加の三本立てである。内容的な面で職員から希望が聞かれていれば教えていただきたい。

(病院)

- ・今年度はフォローアップの時期にコロナ関連で勤務変更や病床立ち上げなどで時間の確保ができず、受講者を送り出せなかった。大学側から内容の提示をしてもらっているが、ブラッシュアップ受講者に比べフォローアップに参加できている人は少なく、病院側の送り出す体制にも課題があると考えている。特に教育に携わる役割にある人が参加できるよう病院側の課題として考えなければいけないと思っている。
- ・当院では職員に役職を就けるにあたり(ブラッシュアップ・フォローアップともに)研修参加者を活用している。そのため、研修に参加して学んできた内容は病院で活かしてほしいと思っている。
- ・ブラッシュアップからフォローアップに進むことはハードルが高いと感じている。内容も洗練されレベルアップしている。自分がチャレンジしたい課題と病院内でやらなければいけない実務、そして大学に来て定期的に学ぶことを全てこなしていくには覚悟が必要だと思う。
- ・フォローアップで研修企画を行うが、準備段階から学びは多いものの一度クリアして終わりになってしまい、継続的に企画するには至らなかった。そのため、最初からハードルを少し下げてもらってもいいのではないかと考えている。

(意見・感想を受けて大学から)

・ブラッシュアップの修了生に意見を聞きながらフォローアップの内容を充実できるように検討していきたい。

○相互交流

(大学)

参加者数がなかなか増えない状況であるが、相互交流についての率直な意見を伺いたい。

(病院)

・参加者の立場として、実際にシミュレーターに触れることで新人教育や院内教育に活かせると感じた。院内研修の際にはぜひ協力してほしい。

・実習を受け入れている病院と交流ができたという点が良かった。受け入れる側の立場の意見をきくことで、職場の活性化やモチベーションの上昇につながったと思っている。

(意見・感想を受けて大学から)

・選択参加をした参加者からは、もっと人がいて参加しにくいのではないかと思い、選択参加にした、という声もいただいている。要綱などの案内もやや堅い形式になっているため、案内や宣伝の方法を検討していきたいと思う。

○Jナースカフェ

(大学)

開催時期、開催頻度、扱ってみたらよいと思う内容など、思いつくところがあればご意見を伺いたい。

(病院)

・ブラッシュアップなどは師長を通し履歴書を作成したりする必要があるが、Jナースカフェは案内が個々に送られるため、個人の決定にゆだねられている。ブラッシュアップほど対象者の周囲で話題にはなっていないようだ。そのため、話として流れてしまっているのではないかと感じている。病院としても、個人への案内のため誰を送りだすとかといった話題にはあまりなっていないのが現状である。

(意見・感想を受けて大学から)

・案内を看護部長の目にも届くような形で送らせていただければ参加しやすくなる可能性があると考えられるため、周知方法を検討していきたい。

○ICT活用について

(大学)

オンデマンドの内容を作り上げるのに想定以上の労力がかかった。大学側では、講義部分につ

いては ICT 及びオンデマンドが可能だが、演習（実技）部分是对面で実施したいと考えている。大学に来ていただくのは距離的な問題もあるが、演習部分については協力いただきたい。

（病院）

・遠方であるため ICT を活用していただけることはありがたいため、ハイブリット形式で継続してほしい。演習については、対面で行うことが重要であるという認識を持っているため、対面で実施したほうが良いものができると考えている。

・ICT 活用はありがたく、コロナのことを除いても Web の活用で参加しやすくなっている。コロナについては対面で参加できるかは法人の決定による部分が多いが、対面が必要な場面では極力参加できるようにしたい。感染の状況にもよるため、その時はまた相談させていただきたい。

（意見・感想を受けて大学から）

・次年度は講義部分は ICT・オンデマンド配信を行い、実技がある演習部分は大学に来ていただき対面で行う予定としたい。

令和4年度連携協力病院会議 出席者一覧

令和5年2月8日

氏名	所属及び役職	氏名(敬称略)	Zoom
公立高畠病院	看護部長	高橋 由美	○
最上町立最上病院	外来看護師長	菅 智美	○
川西湖山病院	看介護部長	長谷部 まゆみ	○
	看護師長	大淵 愛	○
	看護師長	舟山 美穂	○
小国町立病院	看護部長	佐藤 三保	○
	副看護部長	日下 雅美	○
順仁堂遊佐病院	副院長兼看護部長	信夫 松子	○
町立真室川病院	総看護師長	井上 典子	○
みゆき会病院	看護部長	渡邊 修	○
	主任看護師	櫻井 牧子	○
寒河江市立病院	総看護師長	渡邊 ひろみ	○
	看護師長	青木 明美	○
町立金山診療所	看護師長	長岡 由美	○
特別養護老人ホーム はとみね荘	荘長	島崎 慎一	
山形県立保健医療大学	看護学科長	沼澤 さとみ	
	地元ナース事業推進部会長 看護実践研究センター長	菅原 京子	
	地元ナース事業統括担当	佐藤 志保	
	相互交流担当	鈴木 育子	
	履修証明プログラム担当	高橋 直美	
	広報担当	齋藤 愛依	
	Jナースカフェ担当	鈴木 龍生	
	事務局次長	齋藤 正彦	

*欠席:・山形県立こころの医療センター・医療法人敬愛会尾花沢病院・清永会矢吹病院

令和4年度 地元ナース懇談会の概要

日時: 令和4年2月9日(木)

13時30分~15時

オンライン(Zoom)

【出席者】

委員: 後藤道子氏(公益財団法人山形県看護協会常任理事)

山田敬子氏(山形県置賜保健所所長)

神尾みなみ氏(医療法人清永会矢吹病院)

富樫栄一氏(前 東北公益文科大学事務局長)

傍聴: 松田真理子氏(山形県健康福祉部医療政策課看護師確保対策主査)

大学: 菅原京子、鈴木育子、高橋直美、斎藤愛依、佐藤志保、鈴木龍生

【概要】

各事業の実施評価について資料に基づき報告された。その後、事業ごとに協議・評価を行った。

○リカレント教育

- ・リカレント教育、地元ナースの地域での活躍を支援するという趣旨で始まっている事業であり、この事業の取り組みは他県であまりないことである。目標設定をもう一段高く、看護師の離職防止や県外から山形を選んでもらうようなアピールの仕方が有効ではないか。
- ・事業の周知方法についても、さらにいろんな人の目に触れるように工夫することが望ましいと思っている。
- ・連携協力病院のホームページにリンクを張るなどはできることだと思うため、協力を依頼してもよいのではないか。
- ・(特に Up to date について) 診療所宛で郵送するのは大変であるため、県医師会にも伝え、看護師の定着・地域への貢献という視点でアピールし、医師会からも声掛けしてもらうような取り組みができるかと思う。予算のことも考慮すると、医師会の会員宛のメールに混ぜてもらう等の工夫ができるのではないか。
→看護協会研修を行う際も、対象に医師が含まれる研修については、医師会に連絡してチラシを混ぜてもらったりしている。医師会は毎週水曜日理事会をしている。
- ・福祉の場にも相当数の看護師がいる。リカレントについて福祉の場にいる看護師も一緒に対象にしていくとよいのではないか。また、地元ナース事業について地元住民の安心な生活を挙げるため、自治体保健師なども一緒に対象にしてもよいのではないか。間口を広げ、繋がりをさらに広げていってほしい。
- ・郵送代などの経費の課題はあるが、看護師の地元定着を強く押し出すことで、県からの補助金が

もらえるのではないのか。

→①医師確保・看護師確保に関して、枠が決まっているため部分的に予算を回すのは難しい。そのため、県でやっている確保に関する事業にタイアップとして一緒に回してもらうのが良いのではないのか。

②平成 30 年度までは文科省の補助で行っている。期間終了後の予算については、話し合いの中で事業単独に予算を割くのは難しいという記録が残っている。県の研修と一緒に周知するなどの形であれば協力できる可能性がある。

・小規模病院等看護ブラッシュアッププログラム（以下、BP）について、新規施設が 3 か所あった。その 3 か所が参加するにあたり、案内を出しただけなのか、何か別の要因があったのか知りたい。
→〈大学〉今年度の年間計画を郵送するタイミングで BP の案内を行ったため、目に留まったのではないのか。BP の要項はゴールデンウィーク後に再度送る形をとった。案内以外の考えられる要因は思いつかない。

・オンデマンド配信の対応について詳しく教えてほしい。演習の動画について、再生数が多いのにオンデマンドなくしていいのか疑問である。

→〈大学〉昨年度いただいた意見を踏まえ、ハイブリット・オンデマンド配信の対応を充実させた。基本的に当日欠席せざるを得なかった人に補填としてオンデマンドの動画を見もらうなどの対応を行った。講義は Zoom を用いてハイブリット配信したため、Zoom 画面を録画・編集したものを用いた。一方で、今年度中に履修終了したいが、演習にどうしても参加できないという人がいたため、急遽演習部分もオンデマンド配信で対応した。当初予定していなかった演習部分のオンデマンド用の動画撮影・編集に想定よりも時間・労力を要した。そのため、次年度以降の演習は現地での参加のみとしたい。

・（オンデマンド配信について）配信は大変だったと思うが大きなステップアップになった。山形県は土地が広く参加者も散らばってしまうため、オンデマンド配信も含めて ICT の活用を続けていければよいと思う。動画編集についてはプロの手を借りるための予算を確保するなど、続けられる方法を模索してみてもよいのではないのか。

→〈大学〉プロに依頼する場合、かなり高額になる。今年度試行錯誤する中で、特に音声の録音は専門的な道具や技術が必要であることを感じている。自分たちの手の届く範囲でそろえたが、やはりプロ向けの高価であり準備できない。大学側としては、できる部分を明示したうえで可能な範囲でオンデマンド配信を続けていきたいと思っている。

・（動画の編集などについては）芸工大などの県内にいる専門家や情報関連の技術が高い人と連携していけるとよいのではないのか。

○相互交流

・昨今、リスキリング（Re-Skilling）が求められている。医療現場はますます人が足りなくなるため、人材を出したことによって病院にどれだけメリットがあるかを見えるようにする必要がある。個人の勉強という視点だけでは病院も送り出しにくいいため、病院の経営や現場にどのようにつながる

かなどのメリットが見えるようにアピールする必要があるのではないか。

・相互交流における ICT 活用のイメージについて具体的に教えてもらいたい

→〈大学〉ICT 活用は、座学で行うことが多い回（例えば、既に実習の受け入れをしている病院の看護師による講義のコマなど）などでは Zoom を用いて行うことができると想定している。ブレイクアウトルームを活用することで小グループセッションも可能であり、ICT 環境下で行える研修の幅も広がっている。従来の相互交流は現地参加にしていたが、勤務の都合で参加しにくい人も多かった。ICT を用いた非対面での交流にはなるが、参加の間口を広げるために ICT を取り入れることは有効でないかと考えている。

・参加者はオンライン研修について、例えば PC の操作などは慣れているものか。

→〈大学〉コロナ禍になってから受講者もオンライン研修に慣れてきていると感じる。

・参加者からエクセルやワードを教えてほしいという声はあるか。看護職の中では慣れていない人が多いと感じている。

→〈大学〉今年度は Power Point の作り方を研修内容に組み込んでいる。Excel や Word についても要望を踏まえ扱っていくことを検討していく。

○事業普及・推進

・〈大学〉県医師会・山形県・看護協会ともっと連携してく必要があると感じている。福祉関連の看護職にもはとみね荘長より広報していただく予定となっている。

・福祉関係を束ねている場所（協会など）に協力をしてもらい、そちらから周知してもらうことが有効である。（本庁高齢者支援課や老健の協会、特養の協会など）

○事業評価

・臨床評価で本事業が取り上げられることは非常に良いと思う。

・大学生の就職先として、地元の小規模病院への就職は過去と比べてどうなっているか。

→〈大学〉県内への就職率は約 6 割と高くなってきている。小規模病院への就職は、一度大きな病院に勤務してから小規模病院に転職する人が多い。小規模病院等で活躍している卒業生にスポットライトを当て、大学としてもっと広報していく必要があると感じている。

・小規模病院に転職してからは多職種とのかかわりが密になっていると感じる。また、専門性が高い看護師が多く、地元ナースを対象にした研修に積極的に参加している。

○その他

・看護協会の職員も参加したいと思っているが、難しいか。

→〈大学〉受講生というよりは聴講者として参加、もしくは助言いただく立場で聴講してもらうなどでもよいのではないかと考えている。

令和4年度地元ナース懇談会出席者名簿一覧

令和5年2月9日

	氏名	所属及び役職
懇談会委員	菅原正春(欠席) (松田 真理子)	山形県健康福祉部 医療政策課長(兼)地域医療支援室長 (看護師確保対策主査)
	後藤 道子	山形県看護協会常任理事
	山田 敬子	山形県置賜保健所所長
	神尾 みなみ	医療法人社団清永会矢吹病院
	富樫 栄一	前 東北公益文科大学事務局長
山形県立保健医療大学	沼澤 さとみ	看護学科長
	菅原 京子	地元ナース事業推進部会長、看護実践研究センター長
	佐藤 志保	地元ナース事業統括担当
	鈴木 育子	相互交流担当
	高橋 直美	履修証明プログラム担当
	齋藤 愛依	広報担当
	鈴木 龍生	Jナースカフェ担当

部会名【教育力向上部会】
委員名 安保寛明 槌谷由美子 山田香 今野浩之 渡邊礼子 佐藤志保
2022年度 実績と課題
<p>○看護研究相談・支援</p> <p><実績></p> <p>県内の医療機関、小規模病院などを対象として、看護研究相談支援を継続して実施した。今年度は研究支援の枠組みとして、職場研修への派遣、共同研究への発展について検討し、次年度の実施に向け準備を行なった。</p> <p>今年度は医療機関からの研究相談があり、2医療機関において研究活動に対する助言を行った。このうち1医療機関では院内での研究発表会における発表が行われ、教員は講評を行った。(1医療機関はコロナウイルス感染対策のため、紙上発表の形式をとった。)</p> <p>また、看護研究に関する動画の素案を作成し、現在検討中である。</p> <p><課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・医療機関における研究相談は一定のニーズがある。研究活動に対する支援を相談型と講義(研修)型に適した内容に整理する必要がある。また、研究活動を補助する教材を動画などの形式で開発することが研究支援として効果を上げる可能性があるため、検討と開発を続けることが必要である。 <p>○看護教育力向上</p> <p><実績></p> <p>看護教育および管理に携わる人を対象として、教育力向上のための研修会として「看護職者の洞察力を高める演習の展開」を企画して2023年2月16日(木)に実施した。5医療機関から6名の参加があった。</p> <p><課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・一機関から一日程で参加できる医療者には限りがあるため、年度をまたいで開催する、年度内に複数回開催するなどの方が望ましいと考えられる。 ・医療機関における現任者教育や看護学校等における卒前教育の状況に合わせて、研修会の企画や教材開発を行うことが有益であると考えられる。 ・看護学校の教員や訪問看護ステーションの管理職者などの医療機関の管理職者に限定されない参加につなげるため、告知方法や時期に関する検討を行う必要がある。

部会名【地域連携推進部】
委員名 沼澤(統括), 桂・丸山・鈴木龍(高校1年生セミナー, ホームカミングデー), 菊地(母子保健コーディネーター※, 県中連携), 半田・栗田・佐藤志(特定行為) ※母子コについては遠藤恵子教授と連携
<p>【2022年度】</p> <p>実績と課題</p> <p>1. 高校1・2年生を対象とした看護体験セミナー(委託事業)</p> <p>1) 実績 令和4年8月7日、本学で開催。看護体験セミナー4コースの模擬授業を実施し、県内高校1・2年生の計142人が参加。</p> <p>2) 課題 模擬授業担当教員や授業に協力する在校生の確保が困難。今後、検討が必要である。</p> <p>2. 山形県母子保健コーディネーター人材養成研修会(委託事業)</p> <p>1) 実績 1回目：令和4年12月21日、本学(対面)で実施。県内市町村母子保健コーディネーター、市町村保健師、保健所保健師26人参加 2回目：令和5年1月26日、オンラインで実施。県内市町村母子保健コーディネーター、市町村保健師、保健所保健師、産科医療機関助産師看護師40人参加。</p> <p>2) 課題 参加者には好評な研修であった。感染対策の変更に伴う開催方法の検討が必要である。</p> <p>3. 地域医療体験セミナー(今年度は学生支援委員が担当して実施)</p> <p>1) 2022年11月28日、寒河江市立病院で実施。 2020年度と2021年度は新型コロナ感染症拡大のため開催を中止したが、今年度は感染拡大の状況下のため実施医療機関を1施設に絞り、少数の学生対象とした90分の見学や説明を中心としたプログラムとした。5名の学生が申込みうち4名参加(1名はコロナ感染対策のため欠席)。</p> <p>2) 課題 2019年度は地元論(選択科目)の一環として実施したが、新カリの必修科目である「地元(やまがた)探求Ⅱ」の一環として実施するのは困難であった。対象となる学年や学生数、時間の確保、依頼する医療機関の確保といった点からの検討が必要である。</p> <p>4. ホームカミングデー</p> <p>1) 今年度は、2021年度に引き続きコロナ感染拡大のため中止した。</p>

2) 課題

過年度からの課題である、参加者の確保、広報方法、学内の運営委員（卒業生）の負担、開催頻度（毎年ではなく隔年など）、内容等についての検討が必要である。

5. 県立中央病院との連携（大学・病院連携協議会の事業計画による）

1) 実績

病院開催の公開新人研修（4月19日、4月28日開催）に両日学生6名ずつ計12名参加、病院開催の本学対象のインターンシップ（令和5年2月24日）へは学生11名が参加。共同研究や研修会は開催しなかった。

2) 課題

公開新人研修やインターンシップは学生からの評価も高く、病院の開催に応じて引き続き学生の参加を促す。共同研究については、大学教員や病院看護職員への周知と働きかけを積極的に行っていく。

6. 特定行為研修に関する共同研究

1) 実績

令和3年度から引き続きデータ収集を行い、分析結果の一部を令和4年9月16日開催の学内共同研究発表会で報告した。

2) 課題

引き続き分析を行い、その結果は令和5年度の学会で発表予定。

令和4年度 看護実践研究センター運営委員会名簿

氏名	職名
菅原 京子	看護実践研究センター運営委員会委員長 地元ナース事業推進部会長
沼澤 さとみ	看護実践研究センター運営委員会副委員長 地域連携推進部会長
遠藤 和子	看護実践研究センター運営委員
安保 寛明	看護実践研究センター運営委員、教育力向上部会長
桂 晶子	看護実践研究センター運営委員、地域連携推進部会（高校1年生セミナー、ホームカミングデー）
鈴木 育子	地元ナース事業推進部会
菊地 圭子	地域連携推進部会（母子保健コーディネーター、県中連携）
半田 直子	地域連携推進部会（特定行為研修）
高橋 直美	地元ナース事業推進部会
槌谷 由美子	教育力向上部会
山田 香	教育力向上部会
今野 浩之	教育力向上部会
丸山 香織	地域連携推進部会（高校1年生セミナー、ホームカミングデー）
齋藤 愛依	地元ナース事業推進部会
渡邊 礼子	教育力向上部会
栗田 敦子	地域連携推進部会（特定行為研修）
佐藤 志保	地元ナース事業推進部会、教育力向上部会 地域連携推進部会（特定行為研修）
鈴木 龍生	地元ナース事業推進部会、地域連携推進部会（高校1年生セミナー、ホームカミングデー）
齋藤 正彦 （事務局次長）	看護実践研究センター運営委員

山形県立保健医療大学看護実践研究センター運営要綱

制定 平成 27 年 6 月 4 日

改正 平成 29 年 4 月 1 日

平成 31 年 4 月 1 日

(趣旨)

第 1 条 この要綱は、山形県立保健医療大学看護実践研究センター運営規程（平成 26 年規程第 18 号）第 6 条の規定に基づき、山形県立保健医療大学看護実践研究センター（以下「実践センター」という。）の運営に関し必要な事項を定めるものとする。

(運営委員会の構成等)

第 2 条 運営委員会は、看護実践研究センター長（以下「実践センター長」という。）及び学長が指名した教職員で構成する。

- 2 運営委員会に委員長及び副委員長を置き、委員の中から学長が指名する。
- 3 第 1 項の委員のうち、学長が指名する委員の任期は 2 年とする。ただし、補欠の委員として指名された委員の任期は前任者の残任期間とする。
- 4 学長は必要があると認める場合は、第 1 項の委員の他に教職員の中からオブザーバーを指名することができる。

(運営委員会の審議事項)

第 3 条 運営委員会は次の事項を審議する。

- (1) 看護実践研究センターの活動計画に関する事
- (2) 実践センターの予算・決算に関する事
- (3) 実践センターの評価に関する事
- (4) 実践センターと学内委員会等との調整に関する事
- (5) その他実践センターに関する重要事項に関する事

(運営委員会の会議)

第 4 条 委員長は運営委員会の会議（以下「会議」という。）を招集し、その議長となる。

- 2 会議は委員の 3 分の 2 以上の出席がなければ開くことができない。
- 3 会議の議事は出席者の過半数をもって決し、可否同数の場合は議長の決するところによる。
- 4 会議には、必要に応じ委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

(部会)

第5条 実施センターに次の部会を置く。

(1) 地元ナース事業部会

- イ 小規模病院等看護職リカレント教育及び相互交流に関する事
- ロ 学士教育課程との連携に関する事
- ハ 協力病院会議に関する事
- ニ 地元ナース懇談会に関する事
- ホ Jナースカフェ支援に関する事

(2) 特定行為研修部会

- イ 特定行為研修ニーズ及び指定研修機関に関する調査研究に関する事

(3) 看護教員養成講習会部会

- イ 看護教員養成講習会受託事業に関する事

(4) 教育力向上部会

- イ 小規模病院等看護研究指導に関する事
- ロ シミュレーション教育に関する事
- ハ 模擬患者派遣相談に関する事
- ニ 看護専門学校教員との共同研究に関する事

(5) 地域連携推進部会

- イ 高校1年生セミナーに関する事
- ロ 卒業生支援（ホームカミングデー）に関する事
- ハ 県立中央病院との連携に関する事
- ニ 実践センターの広報に関する事
- ホ ICT整備に関する事

2 前項各号の部会の構成員は、実践センター長が指名するものとし、うち1名を部会長に指名する。

3 各部会の会議は定期的に部会長が招集するものとする。

(部会長会議)

第6条 実践センター長は、必要に応じ各部会長で構成する部会長会議を開催するものとする。

2 部会長会議では、各部会における実施状況の報告や各部会間の調整事項等について協議する。

(庶務)

第7条 運営委員会の庶務は、実践センターにおいて処理する。

(その他)

第8条 この要綱に定めるもののほか、この要綱の実施について必要な事項は別に定める。

附 則

- 1 この要綱は、平成27年6月4日から施行する。
- 2 山形県立保健医療大学看護実践研究センター委員会要綱（平成27年2月3日制定）は廃止する。
- 3 第6条第1項の各部会のメンバーについては、「山形発・地元ナース養成プログラム事業」の助成期間にあつては、それぞれ同事業における「リカレント教育チーム」、「看護研究相談・支援チーム」及び「ICT活用チーム」のメンバーとし、部会長は同チームリーダーを充てるものとする。

附 則

この要綱は、平成29年4月1日から施行する。

附 則（平成31年4月1日改正）

この要綱は、平成31年4月1日から施行する。

山形県立保健医療大学看護実践研究センター運営規程

平成 26 年 10 月 31 日

規 程 第 18 号

改正 平成 31 年 4 月 1 日規程第 4 号

(趣旨)

第 1 条 この規程は、公立大学法人山形県立保健医療大学の組織及び運営に関する規則（平成 21 年規則第 1 号）第 7 条第 2 項の規定に基づき、山形県立保健医療大学看護実践研究センター（以下「実践センター」という。）の運営に関し必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第 2 条 実践センターは、県内の看護職を対象に看護継続教育、研究指導、情報発信等を行うことにより、本県における看護実践水準の向上を図ることを目的とする。

(業務)

第 3 条 実践センターは、その目的を達成するために、次に掲げる業務を行う。

- (1) 看護職を対象とした実習指導力養成教育
- (2) 看護職を対象とした実践力向上のためのフォローアップ教育
- (3) 看護研究に関する相談・指導等の支援
- (4) 看護実践・研究に関する情報発信
- (5) その他実践センター長が適当と認めた業務

(職員)

第 4 条 実践センターに、実践センター長、兼任職員及び必要な職員を置く。

- 2 実践センター長は、看護学科教員の中から理事長が任命する。
- 3 実践センター長は、第 3 条各号に定める業務について掌理する。
- 4 実践センター長の任期は 2 年とし、再任を妨げない。
- 5 実践センター長が任期満了前に辞任し、又は欠員となった場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。
- 6 兼任職員は、看護学科教員及び事務局職員をもって充てるものとする。

(実践センター委員会等)

第5条 実践センターの円滑な運営を図るため、実践センターに運営委員会を置く。

2 運営委員会に関し必要な事項は、別に定める。

3 実践センターに部会を置くことができる。

(委任)

第6条 この規程に定めるもののほか、実践センターの運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

(施行期日)

この規程は、平成26年11月1日から施行する。

附 則 (平成31年4月1日改正)

この規程は、平成31年4月1日から施行する。

○協力病院・施設

令和5年3月現在

病院等名	所在地	病床数	主な診療科
公立高島病院	高島町大字高島 386	130	内・外・整形・婦・小
最上町立最上病院	最上町向町 64-3	70	内・外・整形・婦・眼
川西湖山病院	川西町大字下奥田 3796-20	109	内・整形・
小国町立病院	小国町あけぼの一丁目 1	55	内・外・整形・婦・小
特別養護老人ホームはとみね荘	高島町大字高島 303		
順仁堂遊佐病院	遊佐町遊佐字石田 7	84	内・外・小・婦・リハ
町立真室川病院	真室川町大字新町 469-1	55	内・整形・耳鼻
尾花沢病院	尾花沢町大字臈気 695-3	152	内・消・精内・心内・リハ
山形県立こころの医療センター	鶴岡市茅原字草見鶴 51-1	213	精・心内・自動・思春期精神
みゆき会病院	上山市弁天二丁目 8-11	183	内・整形・小・歯・放
寒河江市立病院	寒河江市大字寒河江字塩水 80	125	内・整形・外・眼・皮
町立金山診療所	金山町金山 548-2	0	内・外・小
矢吹病院	山形市嶋北四丁目 5-5	40	内・外・腎臓内科・放・消

○協力病院の位置づけ

内容	協力病院等	以外
リカレント教育企画参画	○	—
リカレント教育受講	○	○
大学との相互交流	○	—

看護実践研究センター
令和4年度 活動報告書

令和5年3月発刊

発行 公立大学法人山形県立保健医療大学 看護実践研究センター

〒990-2212 山形県山形市上柳 260 番地

TEL・FAX 023-686-6614